

その日の早朝、理塘のバスターミナルで康定行きのバスに乗り込んだ。

3年前初めて母の友人らとグループ旅行で訪れた時から草原で暮らす遊牧民に魅せられ、いつか再びこの地に戻り、前回は個人行動の許されなかったこの土地の空気を、自由に存分に味わいたいと望んでいた願いが叶えられた今回の再訪は、たった4日間だったとは思えない程充実したものになったような気がしていた。理塘から立ち去る事は旅の終わりが間近に迫っている事を意味しており、それが私の気持ちを沈んだものにしてしたが、ここで出会った数々の強烈な滞在の記憶に満足し、ほぼ思い残す事なく旅立てる事への清々しさの様なものも感じられていた。

出発を待つバスの座席に腰掛けて窓から名残惜しい理塘の街へ別れを告げていると、突然ピューーッ！！と鋭い口笛の音が聞こえてきた。何？とそちらに目を向ければ、一緒に神山の岩山に登ったタクシーの運転手が自分の車にもたれてニヤニヤしながらこちらを見ていた。相変わらず調子のいい男だ。

お客を送って康定まで行くと言っていた彼とは、まだ薄暗い早朝の鳥葬場で別れて以来だったが、いつの間に戻って来ていたのだろう。「後で払うから、先に出しといてくれよ」などと調子よく食事を奢らせ、ちゃっかり値切られたタクシー代の穴埋めしたりする奴だったが妙に憎めなかった。理塘で最初に出会った人間である彼と最後の最後に再び会えたのがちょっぴり嬉しく、私は彼に向かってワザとしかめっ面をして見せてから、笑って手を振った。理塘にはまたいつか絶対に戻ってきたい。その時に再び彼に会えたらいいのにな、という思いがチラッと心の中を通り過ぎた。

理塘を出発したバスは最初の峠に向かってグングンと高度を上げて行った。標高が4000メートルにもなる理塘は、それより更に標高の高い山に囲まれた盆地の中にある街なのだ。あっという間に眼下に小さくなっていく理塘の街へ最後の別れを告げれば、あとはどこまでも広がる大草原に覆われた山並みが続いていく。

草原といえば一般的には草地の広がる平原がイメージ

されるが、このあたり一帯の草原とは、標高の高さゆえ樹木の生えない高山を覆いつくしている壮大なスケールの草の絨毯だ。明るい太陽の光を草が反射して、遠目に見ればまるで芝生に覆われたように見える山並みが光り輝いているように見えた。そんな緑の山肌の所々には放牧されているヤク達の群れが、双眼鏡で覗かなければそうとは判らないほどの黒い小さな点々となって見えている。

ほんの2週間前には、そんな景色を眺めて弾けそうな期待と喜びに胸を躍らせながらこの道を理塘に向かっていった私だったが、この時の気分はただ切なかった。景色が美しければ美しいだけ、自分はこの土地とは関りの無い下界の人間であり、たった今この美しい土地から立ち去ろうとしている事実が胸に突き刺さる。

風景に目をこらしていれば、時には全く人の気配を感じさせない大草原の中にポツンと立てられた遊牧民の黒いテントを見つけられる事もあった。この地平線まで続いている大草原すべてが彼らの土地であり彼らの庭なのだ。狭い土地でぎっしりとひしめきあって暮らしている都会の人間からは、信じられないスケールの生活だ。富士山よりも標高の高い厳しい自然条件の中、一切の文明生活から切り離された大草原の真ん中で、放牧をしながらテントで暮らす生活は生易しいものではないだろうが、彼らは先祖代々そうやって暮らしてきたのだ。

三年前に初めてこの地を訪れた旅の途中で、やはりこの道をバスに乗って走っている最中に、放牧生活の移動中と見られる遊牧民の家族がそれぞれ颯爽と馬にまたがり、すべての家財道具をヤクと馬の背に積んで、家畜の群れを追いながら移動しているところに出会ったことがある。土煙を上げながら走る黒いヤクの群れが隊列を乱さないよう見張り番の犬が走り回り、その脇をテンガロン・ハットをかぶり荒野のガンマンそのままの風貌の男や、長い髪をなびかせて颯爽と馬を駆るチベットの女性は、四川省の出身でこの土地にも深く関りをもっている烏里氏をして惚れ惚れとさせるほどに格好良かった。

近年では中国政府の政策や時代の流れにしたがって遊牧民の街への定住化が進み、草原のテントで遊牧生活を行っている者は激減しているそうだが、彼らの生活スタイルに時空を超えたロマンの様なものを感じている私には、それはとても寂しい事に思われた。しかし、ほんの

数年前まで世界の深部として閉ざされていた環境にあり、独自の伝統的な生活スタイルを保ち続けていたこのチベット高原にも、近年の交通設備や情報網の飛躍的な発達により、ものすごいスピードで下界の文明や情報が流れ込んできている事は、この旅の間中私にも如実に肌で感じられていた。

これまで草原のテントの中で自分たちだけの世界しか知らずに生きてきた彼らにとり、快適な住居での暮らしは決して否定されるべきものでは無いだろうし、今のような時代に即して生きていくためには、子供の教育や生活の面においても街への定住化は避けて通れないもので、ロマンや伝統などという話は部外者の感傷にすぎないのだろう。

そういえば2週間前の私がこの道を康定から理塘に向かって、チベット人ばかりの小さな乗り合いバスに乗り込んでいた時に、最前列に座ってまるでバスのリーダーのように乗客を仕切っていた男と理塘の街中で再会したのだった。上背が高くこの土地の男であるカムパ特有の鋭い顔立ちで、髪を伸ばしヒゲを蓄えた男は、一目でそれと判る遊牧民系の風貌だったが、バスの中で出会った時の彼は上下揃いのスーツを着ていたのだ。どうみても高級とは言い難い、皺のついてくたびれた背広とズボンに身を着けた彼の姿には、あのカムパ達の勇壮で精悍な趣はかけらほども感じられず、どこか侘しく滑稽ささえ感じられてしまったこの男に私は何ともいえない複雑な気分を抱いていた。

再会とはいっても相手は私の事など全く覚えていないので、正確には街の中で見かけたというのが正しい表現だが、遊牧民のアクセサリや衣装などを扱う店が軒を並べる街の目抜き通りの一角で、数人の仲間達と立ち話をしていた男は一際存在感があり、数日を経て出会っても私には一目で彼だと判った。ジーンズに黒いブーツを履き、ウエスタン風のシャツに革ジャンといった普段着姿の男は、あのくたびれたスーツを着込んでいた時のどこか滑稽で痛々しささえ感じられた彼とは打って違って精悍でカッコ良く、私は思わず駆け寄って、そうよ！あなたはその方がずっと似合うわよ！！と声をかけたい衝動にかられてしまったものだ。

今やこの天空の世界にも怒濤のように入り込んでくる下界の生活習慣や文化に伴い、彼らの生活様式やスタイルが徐々に変貌をとげていくのは自然な事だ。だが、たとえ彼らの生活が変化しても、彼ら独自の文化と誇りは

保ち続けていて欲しいと願いたい。どうか私が憧れてやまないカムパの男達の美意識は下界の世界と同調などせず、いつまでも時代を超越したカッコいい荒野のカウボーイでいて欲しいと心から思う。

かつては大変な難路であったと聞く康定から理塘までの道のりも、道路事情が整えられた現在では特に問題もなく、思いの外早い時間に康定に到着できた。往路でも感じられた事だが、三年前の旅ではそれぞれ1日がかかりだった成都から康定、康定から理塘までの移動時間は大幅に短縮されている様子だ。

移動のバスを降りて最初にしなくてはならない恒例行事は、まず今夜の宿を決める事だった。私の様な貧乏旅行者にとり一番面倒なのがこの毎回の移動先での宿探しだが、その時の私にはまだもう一箇所この旅の当初から必ず立ち寄ろうと決めていた目的地があり、翌朝には再びバスでそちらに向かうつもりでいたので、康定での宿泊は一泊だけだ。宿は始めから便利のいいバスターミナルの真向かいに建っているビルの中の招待所(中国における安宿)にすると決めていた。

その場所は前回の康定滞在の際、バスターミナルで客引きしていたお姉さんに誘われるまま付いて行って泊まったが、値段設備共に私には問題ないレベルだった事と、何と言ってもバスターミナルまで徒歩1分という好立地には満足していた。

今回は目指す場所が決まっていたので声をかけてくる客引き達には取りあわず、荷物を担いだ私は道路を渡ると向かい側のビルに向かった。コンクリートが打ちっぱなしのまま最後の仕上げがなされていないような、いかにも適当に立てられた感じの小さなビルの中には、それぞれ経営が別の招待所が何軒も詰まっていた、前回の客引き姉御に連れて行かれた招待所もその中の一軒だ。おそらく何処に泊まっても似たり寄ったりなのだろうが、せっかくだから他も見てみたいと、私はあえて前回とは別の宿を物色し「香格里拉(シャングリラ)招待所」との看板を掲げた宿を名前だけで選ぶことにした。

今では「地上の楽園」「桃源郷」などの意味で高級ホテルの名前にも使われている「シャングリ・ラ」という言葉は、元タイギリスの作家であるジェームズ・ヒルトンによって執筆された小説「失われた地平線」の中に登場する架空の土地で、チベット奥地のどこかに存在する美

しい理想郷の呼び名として、サンスクリット語を基にした著者による造語だそうだが、近年になり雲南省西北部の中甸という街が、その小説のモデルとなった土地として名乗りをあげ、地名もシャングリラ(香格里拉)と変名してしまった。するとそれに対して、いや本当のモデルになった土地はこっちだと対抗し「最後の香格里拉」(最後のシャングリラ)を名乗りあげた土地こそが、私が心を奪われ愛してやまない稻城亜丁なのだ。

そんな名前の競い合いは多分に観光地として知名度を上げる為の戦略的な香りがするし(実際に中甸は地名を改称した事で一躍有名になり、世界中から観光客が押し寄せるようになったのだそう)、その場に住んでいる人間に使われているのはチベット語の地名である事から、私にはどうしても良い事のような気もしているが、とにかく私にとっての「シャングリラ」という地名は紛れもなく亜丁の方だ。

そんな思いを込めてドアを叩いた香格里拉招待所

は、勿論、桃源郷のような素敵な宿ではなく、案の定前回泊まった宿と同程度の安宿で宿泊料金も同じだった。窓のある明るく快適な部屋は多少料金が高い為、ただ一晩眠る為だけに宿を取る私は、当然窓のない一番安い個室で30元だ。窓がなく狭いとはいえ部屋やベッドはそこそこ清潔だったし、シャワーが共同であるのは安宿慣れしている私には普通の事だ。これまで泊まってきた宿の料金と比べれば部屋の設備に対して30元はやや割高な印象だが、それもバスターミナルまで徒歩1分の好立地を考えれば満足だった。

それに嬉しい事にはこの宿には洗濯機があり、フロントにいたお姉さんに頼むと無料で使わせてもらったので、これまで溜めていた洗濯物を一気に片付けられたのがありがたかった。日の出てるうちに洗濯を済ませ、ビルの屋上のような場所の片隅に洗濯物を干すと、私は既に勝手知ったる土地となっている康定の街に散歩に出かけた。(続く)

